

JSSOGの温故知新とこれからの課題

理事長（財団法人結核予防会 複十字病院院長） 工藤翔二

昨年の学会で千葉保之，三上理一郎，平賀洋明，安藤正幸の各先生方が引き継がれてきた伝統ある本学会の理事長を仰せつかりました。この巻頭言で，ご挨拶にかえさせていただきます。

本学会は1964年に設立された日本サルコイドーシス研究協議会が，81年に日本サルコイドーシス研究会に改称，87年には日本サルコイドーシス学会に発展，そして99年に国際学会（WASOG：World Association of Sarcoidosis and Other Granulomatous Disorders）に準じて日本サルコイドーシス／肉芽腫性疾患学会（JSSOG：Japan Society of Sarcoidosis and Other Granulomatous Disorders）と名称を改めて今日に至っています。

本学会の特徴のひとつは学際性にあります。研究の軸となるサルコイドーシスはご承知の通り，肺，眼，心臓，皮膚，神経など全身臓器にわたる疾患です。そのため，臨床の各領域が力を合わせて臨むことが不可欠です。また，他の肉芽腫性疾患も含め，疾患の病因はもとより，治療も未解明の部分がたいへん多く，患者さんを直接診療する臨床医学と病理学，細菌学，免疫学など基礎医学の研究を一つにして，炎症と免疫の医学のなかで研究を発展させる必要があります。この学際性という特徴は，日本における研究の特色でもある，感染論的立場から病因解明に着手し，嫌気性菌 *Propionibacterium acnes*を見出した1970年代の本間日臣教授から，最近の江石義信教授らに至る研究にも窺うことができます。学会の最も重要な事業として学術講演会がありますが，1981年協議会時代の第1回研究集会以来，毎年開催されており，この10月には第29回（杉山幸比古会長）を迎えます。また，国際学会・シンポジウムは，1972年の国際サルコイドーシス会議を含めて，日本で5回（79年奈良，91年京都，99年熊本，07年東京）開催され大きな成果をあげてきました。

本学会のもう一つの特徴は，患者さんと学会との距離が多く疾患に比べて遙かに身近なことです。1972年，厚生省（旧）の特定疾患対策事業が発足し，74年にサルコイドーシスは7番目の治療研究事業（医療費助成）対象疾患に指定され，「サルコイドーシス」調査研究班（本間日臣班長）が編成されました。以来，厚労省の特定疾患調査研究班（現在は，厚生科学研究

「びまん性肺疾患」調査研究班）の中で，サルコイドーシスは治療研究事業対象疾患として，医療費助成と研究が進められてきました。平成19年度末現在，医療費助成の受給者は18,586名（男：5,183名，女：13,403名）に上ります。これらの受給者のすべてが現在の患者数というわけではありませんが，要医療の患者さんの大部分は受給者として登録されています。また，患者組織「サルコイドーシス友の会」（会員数約650名）も活発に活動されています。このような特長を生かして，実態把握を継続的に進め，患者さんの医療改善を図っていきたく願っています。

本学会の運営には，長年にわたる国鉄中央保健管理所の貢献を引き継ぎ，事務局長を務められた山口哲生博士（JR東京総合病院副院長）の献身があります。現在は，浜松医科大学呼吸器内科の参加を得て，事務局が運営されています。その他多くの方々のご協力に感謝しつつ，挨拶とさせていただきます。